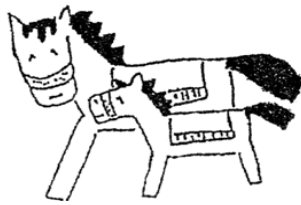


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

25年 6月 NO. 223



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		6月の主な活動		～お気軽にどうぞ～	
6月 7日	金	おはなしの会 10:00～11:30	「おおきなあれ」をテーマに 折り紙シアターやパネルシアターで 楽しみましょう。		
6月 8日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょに遊びましょう。		
6月 22日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験に おいでください。		
6月 22日	土	お手玉教室 14:00～16:00	マイお手玉を作ります。 材料準備のため予約要 (6/10まで)		
6月 25日	火	香川みずぐさんの会 14:00～16:00	香川県消費生活センターの田井有紀子さんより 「悪徳商法の手口を知ろうを 話していただき、フリートークを		
6月 25日	火	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師 (小児科) にゆっくり 相談できます。(予約要)		

- ・毎火曜日 園庭開放 (13時～16時)
- ・上記の活動日以外は13時～18時まで地域開放します
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談 (月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み
保育園生活、入園・見学について
の相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みずぐ 第一童謡集

となりのこども
隣の子供
そら豆むきむき
きいていりや、
ときりの子供が
とられる。
叱られて。
のぞいてみようか、
悪かろか、
そら豆にきって
出てみたが、
またもどる。
またもどる。
どんなおいたを
したんだろ、
しとなりの子供は
しかられる。



少年と風船と一枚の写真

心療内科医 桑山 紀彦

その少年と逢ったのは、奥深いパキスタンの北部山岳地、バラコットの街でした。2005年の大震災で崩れ果てたバラコットは、半壊の建物を壊して更地にする作業のため、街全体が埃（ほこり）でかすんでいました。

当時すべての家屋が全壊し、「悲嘆の丘」と呼ばれた丘は、1,000人以上の方が亡くなった風光明媚（ふうこうめいび）な丘でした。涙も涸（か）れ果てた人々が、家のあとを掘り返して家族の大切な思い出の品物を探していました。僕たちは救援に入り、最初は物資配給をしていました。その日も配給を終えてバラコットから、あのウサマ・ビンラディンが潜んでいたというアボタバードの街へ戻ろうとした時、車の窓の近くに1人の少年が近寄ってきました。

見ると手には、前に僕たちが配った配給のチケットを持っています。見てみるとそれは、2日後に配る予定の毛布とマットレスのチケットでした。

「ごめんね、今日はこれを渡す日じゃないんだ」

「え？そんなあ、今日これをもらっていかないと家族が大変なことになるんだよ」

「う～ん、ごめんね、そう言われてもまだものが届いてないんだ。2日後に来てくれたらぜったいに渡すから。今日はごめんね」

少年は渋々納得してくれましたが、とても残念そうでした。その姿にあまりに申し訳なく思った僕は、思わずポケットに入れておいた風船を手渡してしまいました。

少年は一旦手に取り、それが風船だとわかると、

「こんなものはいらないよ。僕が欲しいのは毛布とマットレスなんだ！」

その風船を返してきました。情けなかったです。家族の命を守ろうとしている少年に、自分はなんて甘ったれたことをしてしまったのかと、少年に対して申し訳なく、彼のことを忘れられなくなってしまいました。

それから2週間後、彼に一言謝りたいと思い、彼を捜しました。手がかりはたった1枚の写真だけです。相棒のファゼールさんは一所懸命、1軒1軒のテントを訪ねてくれましたが、広いバラコットの街ではなかなか見つかりません。でも2時間ほどぐるぐる回っていたら、「どうも彼のものらしい」というテントに行き着きました。近づいていくと、あの時の少年が同じ赤いジャンパーを着て飛び出してきてくれました。



ワジーム 13歳



くわやま・のりひこ

名前はワジームといいます。13歳でした。あの日はお父さんがケガで入院していたそうですが、今は良くなり、既に出稼ぎに出たそうです。お父さんが不在中で、たった1つの男手としてお母さんと3人のお姉さんを支えているワジーム。テントの中に入ると、それこそ彼が命がけで集めたという救済物資が山のように積まれていました。僕はあの日、風船を渡してしまった申し訳なさから、もしも彼に逢えたら渡そうと思ってお土産を持っていました。1つは電気のない暮らしに役立つヘッドライト。そして腕時計。「あの少年の時間がちゃんと前に向かって進んでいきますように」と願いを込めました。

そして、もう1つ渡したいと思っていたもの。それは風船でした。あの時は、「こんなものいらないよ！」と返してきたワジームでしたが、今回はいい笑顔で風船を受け取ってくれました。ほんの少し気持ちが軽くなったものです。そして、ワジームはことのほか僕のカメラがお気に入り、ずっと首からかけていました。日が暮れ始めたので、車まで送ってくれたその道すがら、よくする質問を試してみました。

「ねえ、ワジームは将来何になりたいんだい？」

「僕？そりゃあ軍隊に行きたいよ！」

「え？なんで？」

「だってさ、困り果てていた僕たちを助けてくれたのは軍隊の人たちだったよ。このテントだってさ、彼らが使っていたものを分けてくれたんだ。僕、そんな優しく強い人になりたいから、軍隊に行くよ」

軍隊は確かに災害救援もするけれど国境では銃を持っているから、複雑な気持ちでした。

ところが別れ際、

「でもね～」というので

「え？何、どうしたの？いま“でも”って言ったよね」

「うん……」

もじもじしています。すると突然、

「ねえ、このカメラって写真を撮るものでしょ」

「ああ、そうだよ」

「それですてきな人とか美しい風景撮ったら売れるかな？」

と聞くので、

「そりゃあもちろんさ！だって君の故郷はあのカガン・ヴァレイでしょ。それだって絵はがきにすると売れるさ！」

「そっか、僕ね、実はカメラマンになりたかったんだ」

と、打ち明けてくれました。

「じゃあさ、そのカメラでこっち撮ってみてよ」

「え～、いいの？」

「遠慮しないでさ、撮ってみてよ！」



ワジーム作品
第一号

「わかった！」

そして1枚の写真を撮ってくれました。僕の大切な宝物、そしてワジームの作品第1号になりました。

人は出逢うことができます。僕はこうしてまた大切な人に出逢いました。そこから人は多くのものを学びます。僕がワジームから学んだこと。それは、決してあきらめないこと。家をなくし、お父さんもケガをして動けず、一家としての存亡が危機にさらされた時、彼は動き続けました。自分にできることに対して一所懸命動き続けたのです。

その姿を見ると、

「自分もしっかりしないと」

という気持ちになります。それは決して勝ち負けではありません、エネルギーの分かち合いなのでしょう。途上国にはいつもそれがありません。

2011年3月11日、津波を受けてさんざんな目に遭（あ）った時、僕は「もうダメか」と思いました。今でもあの時の絶望を思い出します。まわりは瓦礫（がれき）の山、多くの患者さんや友人を失い、クリニックの経営ももう終わりだと。

そして、NPO法人「地球のステージ」での公演が多かった福島、宮城、岩手の3県からの依頼はもう来ないだろうという思い……。 「公演ができない」という思いは絶望そのものです。

けれど、うつむいて日々トボトボあるいていると、時折ワジームのことを思い出します。あんなに小さな少年があきらめないで前を向いて歩いていた。その事実。「ここは踏ん張らないといけない」と思えてくるのです。

今は、おそらくカガーン・ヴァレイに戻っているワジームは、津波でさんざんな目に遭った1人の医師の心を今も励まし続けていることを知らないでしょう。でも人間はそうやってつながっていくもの。いくつもの出逢いに支えられながら、記憶が人を動かすエネルギーを創り出しているのです。

くわやま・のりひこ

1963年、岐阜県生まれ。第14回地球倫理推進賞を受賞したNPO法人「地球ステージ」代表理事として各国で医療支援にあたる。東日本大震災翌日には、院長を務める東北国際クリニック（宮城県名取市）を24時間体制で開放。被災者への長期的な心のケアを続ける。

～～（新世 6月号より）～～

